

クイズラリーA (7-7編) 解答と解説

問題1(★1)

・野生のウサギはどうやって寝ているでしょうか？

- ① 目を開けて寝る ② 片目を開けて寝る ③ 両目を閉じて寝る

答え①

多くの動物から捕食の対象であるウサギは寝るときも警戒を緩めません。ペットとして飼われている場合で、安心できる環境であればお腹を広げて大の字で寝ることもあるそうです。

問題2(★2)

・自然の家にはニホンリスという種類のリスがいます。

さて、このリスには頬袋(ほおぶくろ)がついているでしょうか？

- ① ついている ② ついていない ③ オスだけについている

答え②

頬袋はシマリス属やジリス属などがもっています。
リス属のニホンリスにはありません。

問題3(★3)

・野生のイノシシの大きさはどれくらいでしょうか？

- ① 50センチくらい ② 1メートルくらい ③ 1メートル50センチくらい

答え③

自然の家に生息しているのはニホンイノシシです。平均で全長 110～150 cm くらい。高さ 50～90 cm になります。国内最大のもので 1メートル 80センチ 体重 240キログラムのイノシシが滋賀県で捕獲されました。

問題4(★4)

・野生のタヌキが、『とても驚いたとき』することは、次のうちどれでしょうか

- ① 死んだふりをする ② 臭いおならをする ③ 内蔵をはき出す

答え①

ハンターに銃で撃たれたタヌキは、タマが当たっていないのに、死んだふりをしてハンターが油断した隙に、逃げ出すことがあるそうです。タヌキが死んだふりをするを『タヌキ寝入り』と呼びます。もしかすると、単に気絶しているだけかもしれませんが…。②はスカンク、③はナマコの驚いたときの防衛行動ですね。

問題5(★5)

・イモリが持っている特殊な能力は次の内どれでしょうか？

- ① 超音波を出す ② 毒をもっている ③ 長い舌をもっている

答え②

イモリは、フグ毒(テトロドトキシン)と似た毒を持っており、危険になると、皮膚から白くて臭い液を出します。この毒がにがくてまずいので、イモリを食べる生き物は少ないようです。また、イモリの毒は猛毒ではありませんが、イモリを触った手で目をこすると粘膜が腫れてしまうので、すぐに手を洗う必要があります。イモリに限らず、両生類で毒を持つものの多くが、餌である昆虫(特にアリやハチ類)からフグと同じく捕食により毒を得ています。①はコウモリ、②はカメレオンです。

問題6(★6)

・ムササビはグライダーのように木から木へ飛ぶことができますが、どれくらいまで飛べるでしょうか？

- ①10メートル ②50メートル ③150メートル

答え③

ムササビは長い前足と後足との間に飛膜（ひまく）と呼ばれる膜があり飛膜を広げ160メートルもの距離を滑空した記録があります。鳥のように羽を羽ばたかせて飛ぶわけではありません。被膜を使って高い所から低い所上手に木から木へ飛び移る姿はまるで忍者のようです。

問題7(★7)

・フクロウは首だけを動かして周りを見ることができます。どれくらい首を動かすことができるでしょうか？

- ①右と左を向くくらい ②自分の真後ろまで ③ほぼ一周回転できる

答え③

フクロウだけが首が回るというわけありません鳥類は、ほかの生物に比べてよく首を回すことができます。その範囲たるや、約270°もあります。その秘密は頸椎（けいつい）の骨の数にあり、ヒトやイヌなど、ほとんどの哺乳類は骨が7個。首の長いキリンも同じ。それに対して鳥類は骨が多い。白鳥は25個もあります。骨の数が多いと、それだけ首を柔軟に動かすことができるし、よく回せます。フクロウの仲間は14個。正面を向いた状態から、左右にそれぞれ270度も回転できるのです。

問題8(★8)

・カニはどうやって大きくなっていくのでしょうか？

- ①脱皮をして大きくなる ②固いカラを自分で大きく作っていく ③さなぎになって大きくなる

答え①

脱皮すると、出てきたカニの甲羅はぶよぶよです。これが数日で硬い甲羅になりますが、硬く固まっていく間に大きく成長します。②はカタツムリなどのカラを大きくする方法。③は蝶々などの昆虫に見られる成長方法です。

クイズラリーA アニマル編 指導のポイント

<設定時間>

約2時間(答え合わせや振り返りを含める)

<ねらい>

自然を散策しながらポイントを発見し、選択方式の問題を解答していくことにより、自然や生き物のへの興味を育む。また、仲間同士で答えを相談することにより、自己主張や協調性を育む。

<展開方法>

グループで解答用紙を持ち、地図に書かれたポイントへ移動し、看板を見つける。その後、看板にかかっている3択問題から解答をグループで相談し、一つ選んで、解答用紙に記入する。

答え合わせ時に解説を参考にしながら「なぜそうなのか？」という説明を参加者にすることにより、自然への不思議や興味を育てていきたい。